

白虎隊の戦いと飯盛山

戸ノ口原で戦った白虎隊士中二番隊は 37 人いました。その隊長は、中隊長の日向内記で、さらに篠田隊 17 人（日向が不在となると篠田儀三郎が指揮）、小隊長の山内弘人（戦い後の行動不明）が指揮した山内隊 20 人、半隊長の原田勝吉が指揮した臨時編成の原田隊 7 人の 3 隊に分かれていました。飯盛山の墓碑 19 人は、飯盛山で自刃した 16 人と戸ノ口原で戦死した伊東悌次郎ら 3 人を含んだものです。



戊辰戦争では、1868 年 8 月 23 日（現在の 10 月 8 日）朝 5 時頃から戦闘が開始されます。篠田隊は、最前線の戦いで 3 人が戦死。一旦、強清水東の露营地に後退しています。その後、白虎隊生残りの飯沼貞吉が書き遺した『白虎隊顛末記』には、戸ノ口原の溝（塹壕）を出て、篠田隊 16 人は、篠田を最後に退却、ようやく敵から離れ、進むこと約 20 丁（約 2 キロ）、敵の追撃を逃れたのは、石の地蔵がある場所（赤井新田付近）に出ます。そして敢死隊（かんしたい）の宿所まで行きましたが、すでに敵に襲われ死屍が取り残されていました。そのため若松を目指し、西に進み不動川沿いに下ります。酒井峰治の『戊辰戦争実暦談』には、赤井新田から江戸街道（白河街道）に出で、穴切坂から左（南）に向け敵を避けて、若松を目指したとあります。山内小隊長が後ろから来て、石山虎之助が「沓掛峠に赴いて決戦するつもりです」と答えると山内は「一旦敵を避けて再起を図ろう」と勧められ後に進んだが見失っています。そこで、赤井の穴切坂から沓掛峠には進まず、三方の分かれ道に出た。そこで飯盛山へ行く者と、東山町の愛宕山にたどりついた原田隊が分かれるようです。原田隊は藪をくぐり、岩を越えて、途中きのこ小屋で、松茸と米五合を煮て食べています。

篠田隊は『白虎隊顛末記』によると、「前夜の残飯多少腰にするものあり」と書かれ、食糧は多少あったようです。残飯を石地蔵のくぼみ石に入れて水を加え、16 人が手ですくって交互に食べています。滝沢峠麓の滝沢まで来ると、峠を下る軍隊に遭遇します。新政府軍は午前 8 時には、飯盛山北の堂ヶ作山に到達していました。滝沢峠で軍兵に敵か味方か合言葉を掛けますが、応対せず、銃を向け永瀬雄治が腰を撃たれたので、南の飯盛山へ逃れます。飯盛山は、藩士たちも常に遊び場としていた場所なので、地形を知っていました。負傷者が居たので洞門をくぐり、弁天堂で休憩し、さらに進むと、砲撃音と城下の大火災が目に入ります。そこで墓地の上に進み野村駒四郎が「今や満目のあり様、欺（か）くのごとし、臣士の分、君に付くすは正にこの秋なり、おだやかに滝沢街道を進む敵を衝くか」というと。井深茂太郎が「若松城に入るにしかず」と入城を主張する。そこで各自怒り、ののしり、激論となります。篠田儀三郎が「最早（もはや）欺（か）くなる上は策の講ずべきなし」「敵に虜（とりこ）にせられ、縄目の耻辱を受けるごときあれば、上は君に対してなんの面目ある、下は祖先に対しなんの申し訳やあるしかず。潔くここに自刃し、武士の本分を明にするにあり」とあり自刃が決まります。午前 10 時～11 時頃です。服装は、すべて洋装で、自刃したのは 16 人、その中で飯沼貞吉だけが生き残ります。遅く飯盛山にたどり着いた石山虎之助と戸ノ口原で戦死した 3 人が追加され 19 人で墓は造られます。飯沼貞吉は後に貞雄と改名し 79 歳で亡くなり仙台に墓があり、飯盛山にも墓が建てられます。 文責 石田明夫